

2019年5月
1155号

万葉
Manyō

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5

(一冊の会研究室)

令和初の櫻華塾

新しい時代の幕開け 一心新たにー

外務省は、諸外国に対する新元号「令和」の説明を「美しい日本・美しい調和「ビューティフルハーモニー」としてしています。史上初めて日本の元号に国書が採用されました。新しい時代「令和」は万葉集が出典です。万葉集は成立当初から皇族や貴族の歌はもとより、“詠み人知らず”と言われる一般庶民の歌が多数集録されており、当時の人々の言語や素朴な情感を記録した史料です。一冊の会は創立当初から、「万葉集として大衆に受け継がれる史料となるように」という想いを込めて、「万葉」を定期的に発刊しており現在1155号となりました。20年前一冊の会が出版した「1946.4.10 初の婦人参政権行使と日本女性自立への^{たびだち}出発」の2頁に1968年取り上げた本が万葉集であると記されています。草創の時代の先輩たちの行動に敬意を表したいと思います。『明日への希望と共に、日本人一人ひとりが大きな花を咲かせる』という願いを込められた令和。一人ひとりが新たな時代へと心新たに集い、5月12日新時代令和初の櫻華塾が開催されました。

新時代、令和へー大槻会長の講話

令和という新時代を生きる為には自分で自分の歴史を築いていかないとはいけません、と大槻会長。一冊の会の事務所には平成の終わりから令和の最初まで多くの方が挨拶や打ち合わせに訪ねて下さり、大槻会長と小山副会長は連日大忙しとのこと。新しい時代令和を生きる為、今までの一冊の会の歴史を振り返りつつ大槻会長が講話されました

◆ハンセン病患者の心に寄り添って

上皇・上皇后両陛下もハンセン病療養所をご訪問されていらっしゃいます。一冊の会永久最高顧問の園田天光光先生は、26歳の時、ハンセン病は伝染病ではないと判断をし、病療養所で入院患者と共にスイカを召し上がったお話をよくして下さいました。大槻会長は、21歳の時、食糧等を持って多摩の全生園を慰問したそうです。東日本大震災の支援に東北を訪れた時も、大槻会長、小山副会長、横山さんの三人で東北療養所に訪問しました。その時事務員の方から、3日前に当時の天皇、皇后両陛下に訪問を頂いたばかりです、と報告を受けました。風評被害に泣いた患者の皆さんにこれからも心を寄せて参ります。

◆歴史の積み重ねが今につながる

冊子「万葉」の創刊号(2004年10月発刊)の6頁に、園田天光光先生の講演が詳しく載っております。園田先生は日本と中国の架け橋となり、生涯交流を続けておりました。一冊の会では、天津の周恩来・鄧穎超御夫妻の若き時代の学び舎に本や日本人形、富士山の写真などを東北出身の女性、田中さんに持って行って頂きました。天津の日本学校の教師となった田中さんが、そこから送って下さいましたお礼状が届いた時は、会の皆さんで大喜び。田中先輩への感謝の思いを返す為にも私たちは今後も東北の被災地の方に心を寄り添って参りましょう。

◆時代を視る

最後に大槻会長は一冊の会筆頭最高顧問赤松良子先生のコラム、「時代を視る」に掲載された“平成が終わり”という投稿を紹介されました。平成という時代が30年余りで終わり、令和の時代となりました。赤松先生は「平成という30年間戦争がなかったのは何よりものことだった。と云いたいが、同時に戦争を知らない世代になっていくこと

の危うさも感じている」と述べられております。戦争を風化させず、平和を願い一冊の会では2015年9月よりSGDsの達成に向け一人ひとりが2030年迄目標に向かって地球人としての誇りに燃えて研鑽しようと力強く語られました。この令和という時代を満々たる生命力で生き抜いて行こうと決意しました。

石田理事長の講話

◆3月22日に開催した「講演と音楽の夕べ」では当日体調不良により会長のお声が出ず、皆さんが心配されていましたが、メンバーみなさんがたくさんの方々にお声かけをし、前日の夜遅くまで準備をし、当日の素晴らしい立ち居振る舞いがあった大成功しました。この会は新しい目標出発への第一歩であり、FAWAだけでなく一冊の会の活動としての起爆剤、節目になったと思います。◆4月は地方選挙がありました。「投票の心得10カ条」のうちの第1条に掲げられている、『有権者一人一人が、どういう国、どういう社会が望ましいかを考えなければ、本体がないのいつまでたってもいい政治家は生まれない。』といった内容の言葉があります。このことは当たり前ではありますが、なかなか難しいのが実情。地方選挙は国会ではないけれど、地域社会、地域のあり方や生活をどう思うかが我々の中にないと、我々自身が地域に真剣に向き合っていないと、真剣に地域の事を考える政治家は現れないのです。選挙は有権者も政治家も双方が国・地域に真剣に向き合うことが必要であるということ。それがあって初めて、望ましい地域・社会・国の実現につながるのです。◆令和の時代を迎えましたが、平成の時代を振り返ると平和だったという人もいます。人それぞれ捉え方は違います。1989年平成が始まった頃は、世界的には冷戦が終結した頃です。果たしてそれから30年世界は平和であったのか？世界規模の戦争は起こっていませんし、核兵器も使われていません。だから平和であったか？実は全く逆で、冷戦崩壊後に民族紛争や地域紛争が各地で勃発した。核よりももしかしたらもっと酷い殺され方をしている人が何千人という単位にいるというのが30年の歴史。そして未だに難民や虐げられている人を生んでいる。核はまだ全世界に14500発あるということはどう受け止めるのか。いつどうなるかわからないこの状態を平和だと言えるのか。冷戦崩壊から30年で世界がどう動いているか、そして日本として、我々はどうか、世界的な視野を持たなくてはならない。◆本日は母の日です。相馬雪香は難民支援の母と言われて、大槻明子は社会貢献の母と私は思っています。

お二人に共通しているのは”利他の心”です。利他という

のは”思いやり”のこと。困っている人々に寄り添い、想像力を巡らせて手を差し伸べる。苦しんでいる人の気持ちがわかる、痛みがわかる、苦しみがわかる、だからできることからやる。人に何かを施すことで、それを自分の幸せだと感じ、見返りを求めないということ。大槻会長や小山副会長は、とても幸せに見えますし、ご本人たちもきっと幸せでしょう。これはなかなかわかっていても、できるものではありません。一冊の会には、そのような思いの方々が集まってきてくれている。次の世代にも引き継いでいかななくてはならない。社会や国や世界に対して、何ができる



かを考えて、できることをやっていかななくてはいけない。そうすることが、同時に自分の幸せにも繋がっていると感じられ、そのような自分の生き方に誇りを持つて、というのが一冊の会です。

令和初の櫻華塾。相馬雪香先生、大槻明子会長お二人が共通して持っておられる利他の心、今後も会長や先生方から学び続けることで、会長の心や考え方に触れ、一冊の会一同心ひとつに令和に大きく羽ばたいて参りましょう。



会長と相馬先生と箱根さんへ「母への」感謝を込めて